

# 子どもの歌のうたい方について

## —幼児教育者養成校における保育内容の実践研究—

Promoting Children's enjoyment of song  
at a visceral level

長 井 春 海

### 1 はじめに

幼児教育学科の保育内容の研究（保育と音楽表現）は保育現場において幼児の音楽表現活動に適切な援助が出来る力を持つ保育者を養うことを目的としている授業科目ある。

幼稚園教育要領には幼稚園児が幼稚園修了までに育つことが期待される力を育てるための指針を解説している。それらは幼児の発達の側面から「ねらい」と「内容」にまとめ「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」5つの領域に編成し示している。<sup>(注1)</sup>各領域は互いに連携を取るものであるが、音楽に一番近い関連領域は「表現」となる。感性と表現に関する領域「表現」では「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」と掲げ、「ねらい」として以下の3点を示している。<sup>(注2)</sup>

(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性

(2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ

(3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ

その「内容」としては(1)～(8)まで掲げているがその中で

(1) 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、楽しんだりする。

(2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。

(3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。

(4) 感じたこと考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりする。

(6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう。

(8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりする楽しさを味わう。

これらの6項目が音楽表現活動に直接深い関係のある内容と思われる。項目(6)の「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう」では「生活の中で音楽に親しむ態度を育てる。その際、正しい音程で歌うことや一つの楽器を上手に演奏することなどを性急に求めず、幼児自らが音や音楽で十分に遊び、表現する楽しさを味わう活動を展開させることが重要性である。」<sup>(注3)</sup>と解説があり、楽しむことに重点が置かれている。「正しい音程で歌うことや一つの楽器を上手に演奏することなどを性急に求めない」「幼児自らが音や音楽で十分に遊び、表現する楽しさを味わう」点を強調している。

① 正しい音程で歌うことを性急に求めない。  
子どもが歌う行動はどのような経過をたどる

のか。誕生後の乳児が約1年半余りの年数を経て言葉を習得していく過程と共通点がある。ことばを習得するには「それは知覚と生産の密接な相互関係が成り立っている高度な知的な学習から成り立ち歌うことについては知覚の中の、音の高さ、方向、長さリズム等を識別し認知し記憶する能力が必要とされる。自分が歌いたいと望む音を筋肉のコントロールによって声に出すことが出来る能力が必要となり、聴覚と筋力の供給があって子どもは歌うことが出来る。」<sup>(註4)</sup>と述べている。メロディーや音程が不安定なのはこどもの成長発達の過程では当然の現象と考え、子どもが心から充分に楽しんでいるかに主眼を置き、歌う経験を通して聴覚と身体発達の調和を援助していくことであろう。しかし、教育者には当然正しい音程で歌うことが求められる。

## ② 幼児自らが音や音楽で十分に遊び、表現する楽しさを味わう。

幼児自らが起こす音楽表現行動に「歌う」ことが揚げられる。幼児自らが歌いだしたくなるよう促すのが教師の役目である。いろいろな方法で歌いだす環境を作り出すことが可能である。子どもが歌いだす有効な働きがけとして渋谷伝氏は「心を込めた歌声が子どもの感性にゆさぶりをかけ子どもが歌いだす決断と気力歌い出す現象がおこる。そして揺さぶりをかける最高のものは教師のイメージゆたかな生(なま)のこえである。その歌に刺激されて感性がゆさぶられ、イメージが流れ出し、それに呼応して、歌う気がおこる。」<sup>(註5)</sup>と器械から流れる音でなく教師がこころを込め、イメージをもって歌って聴かせることを実践から述べている。また、子どもが歌いだしたくなる歌については、教師自らの声による感性の働きについて「巧みさをみせびらかしたり、声で圧倒する専門家の歌より、教師のイメージ豊かな語りかけてくるおだやかな声と子どもの眼のなかにすいこまれるように歌う“歌う振り”を上げている。」<sup>(註6)</sup>ピアノの伴奏のない素声で聴かせるのも良しとしている。また声を出すことの身体性については竹内敏晴氏は「こえとかことばをくからだの動きと別々に考えることはできない。自分のからだの中でその人に対して何か働きかけようと

いう「気」が起こったときに、ずっと手が動く、こえが出てゆき、相手にふれる。教師の声が子どもに触れたとき、声が発声され歌となって表現される。声を出すとは気を出すことである。出す気がなければ、声はでない」<sup>(註8)</sup>と述べている。

## 2 「保育内容の研究」の考え方

養成校での保育内容の研究(保育と音楽表現)の主な授業目標は幼稚園指導要領を達成するための教師の役割を学ぶ授業と考える。幼稚園指導要領解説内容の項目(6)に「生活の中で音楽に親しむ態度を育てる。その際、正しい音程で歌うことや一つの楽器を上手に演奏することなどを性急に求めず、幼児自らが音や音楽で十分に遊び、表現する楽しさを味わう活動を展開させることが重要性である。」とあるが、保育内容音楽表現の授業では「生活の中で音楽に親しむ態度を育てる。その際、正しい音程で歌うことや一つの楽器を演奏することを求め、学生自らが音や音楽で十分に遊び、表現する楽しさを味わう授業を展開させることが重要である。」と「正しい音程で歌い、楽器を演奏する」ということ以外は幼児に対する内容をそのまま学生に対する内容に置き換えた授業展開とした。徹底して楽しさを求める授業展開を心がけている。正しい音程で歌うことは、表現する楽しさを心から味わうための基礎技能であると考え。そして正しい音程に加えてイメージ豊かな表現力を養うことを求めている。

## 3 音楽表現指導過程

音楽表現とは音を主体に表す現象である。表現とは「心的状態・過程または性格・志向・意味など総じて精神的・主体的なものを、外面的、感性的形象として表すこと。また、この客観的・感性的形象そのもの、即ち表情・身振り・動作・言語・手跡・作品など。」<sup>(註9)</sup>とある。心に感じたものを表現するためには「感じる」「気づく」等の感覚を養い意識化することが重要となる。「表現の教育は生き、息、意気、粋の姿を大切にすること。自由に開放されたからだ(心)で気概をもって集中すること。からだの自由な気楽さを保ち、相手を意識し、やる気を

もって、何かを表し、何かを感じ、自分をきたえていく教育ということになりそうだ。」<sup>(注10)</sup> 表現の授業は学生自身の精神面と関わりが多く思考錯誤を繰り返しながら授業をしてきた。表現の授業は1年次に年間30回ある。授業内容は学生の音楽経験の有無や保育現場の実態などを考慮して次の四過程で組み立てている。

#### 第一過程

ことばからの出発（日常のことばを音楽面から意識する。言葉遊び、わらべうたなどで“からだとかえ”との感覚意識をめざめさせる。）

#### 第二過程

ことばで表現する（日本語の特性を知る。ことばを感じる。ことばと喜怒哀楽などの基本感覚を意識化する。明確な発音。リーダーズシアターを演じる）

#### 第三過程

子どものうたを歌う（子どものうたのうたい方。ことばとメロディー。イメージを探る。うたと動きなど）

#### 第四過程

総合音楽表現（オペレッタを全員で行う。各々の役柄を客観的に観る。学外で発表し、評価を得る。より良い表現を目指し協力して行い達成感を得る。）

本稿では第三過程“子どものうた”のうたい方、子どもに歌う気を起こさせるイメージ豊かなうたい方に焦点を絞り述べてみたい。

### 4 子どもの歌のうたい方

“子どものうた”の遊び方、成り立ち等いろいろあるが、“子どものうた”の歌い方についての指導書はほとんど見かけない。“うた”は当然のことであるが、うたを聴くとその歌の表している情景が浮かんだり、その歌に係わるいろいろなことが脳裏に浮かぶのが本来の性格である。歌い手自身がことばをイメージし、メロディーにのせて発声するからこれらの現象が誘発されるのである。“こどものうた”を歌うことは単に音程を正しく歌詞を読んでいるだけに聴こえたら、それらは誘発されないであろう。

“子どものうた”は絵のない絵本であり、お話がメロディにのせて語られているとも言える。心を込めて子どもの感性を動かす歌い方を

心がけなければならない。ことばをはっきり発音する。発音した言葉を発声する。音程、歌詞などうたを歌える状態を前提とした上でのうたい方、表現方法の一端を以下に述べてみる。

#### 具体例Ⅰ 「ぞうさん」

まどみちお作詞 団伊玖磨作曲

#### ①イメージを持ってうたう

##### 歌詞 1

ぞうさん ぞうさん お鼻がながいのね  
そーよ かあさんも ながいのよ

##### 楽譜 (注11)

ぞうさん まどみちお 作詞 団伊玖磨 作曲

The musical score for 'Zou-san' is presented in two systems. The first system includes a vocal line with the lyrics 'ぞうさん ぞうさん お鼻がながいのね' and a piano accompaniment line. The second system includes a vocal line with the lyrics 'そーよ かあさんも ながいのよ' and a piano accompaniment line. The tempo is marked 'Moderato' and the key signature has one flat.

#### <状況をイメージする>

子どもが象を見て話しかける。

自分と違う鼻について聞いてみる。

“ぞうさん どうして鼻がながいの!”

“かあさんだって ながいんだ”

小象はわたしの母さんだって長いんだと自慢して答える。

##### 歌詞 2

ぞうさん ぞうさん 誰がすきな  
あのね 母さんが すきなよ

<イメージ>

子どもが象に聞いてみる。  
 “どうさん！誰が好きなの！”  
 “あのね 母さんが すきなんだ”  
 小象は母さんが好きとはにかみなが  
 ら応える。

②替え歌による歌遊びを展開する

歌詞 3

どうさん どうさん 誰がすきなの  
 あのね 父さんが すきなよ  
 <歌詞12番に子どもと一緒に住んでいる  
 人お父さん、おばあちゃん、おじい  
 ちゃん等次々と歌に組み込んで歌う。>

歌詞 4

どうさん どうさん 何がすきな  
 あのね バナナが すきなよ  
 <学生に象の好みそうな物を問い\_\_\_\_に  
 入れて歌い、学生の自発性を促す>

歌詞 5

〇〇ちゃん 〇〇ちゃん なにがすきな  
 あのね 〇〇が すきなよ  
 <〇〇ちゃんに学生の名前をいれ、学生  
 自身のすきなものを即興的に歌う。>

③この歌は対話になっている。誰もが口ずさむ  
 この曲を単に歌う、つまりメロディーの上に単  
 に歌詞を読んでいる表現方法と歌詞のイメージ  
 を理解し、対話を意識した場合、特に一番の歌  
 詞“そーよ”の歌い方と二番の歌詞“あーのね”  
 の歌い方には明確な相違がみられた。こころの  
 感じ方で表出されたものが変化する。

具体例Ⅱ 「どんぐりころころ」

青木存義作詞 梁田貞作曲

歌詞

どんぐりころころどんぶりこ  
 お池にはまって  
 さあ大変  
 どじょうが出てきて  
 今日  
 は  
 ほっちゃん一緒に  
 あそびましょう

楽譜 (注12)

どんぐり ころころ

青木存義 作詞 梁田 貞 作曲



①イメージを持つ

どんぐりが山からころがって池に落ちた情景  
 描写である。池の中にはどじょうが住んでい  
 て一緒に遊ぼうと呼びかけた。

②擬態語・感嘆詞・炸裂音

この歌詞には擬態語が使われている。“ころ  
 ころ”小さいものが転がる様子を形容したこ  
 とば。さあ大変の“さあ”感嘆詞などが使用  
 されているので“ころころ”“さあ”のこ  
 とばを感じて歌う。また“でてきて”の“き”  
 の発音は言葉を話すように発声する。

③2拍子を意識して歌う。ことばのアクセント  
 が一致していることを意識することによって、  
 うた全体いきいきし、ことばがはっきりと伝  
 わる。

④上昇メロディーを意識する。

“さあたいへん”の“さあ”の音は掛け声を  
 かけているようであり、“あそびましょう”  
 の上昇メロディはこれから一緒に友だちにな  
 ると明るく誘いかけている様子を歌う。

### 具体例Ⅲ 「大きなたいこ」

小林純一作詞 中田喜直作曲

おおきなたいこ  
おおきなたいこドンドン  
ちいさなたいこトントントン  
おおきなたいこ  
ちいさなたいこ  
ドーンドントントントン

楽譜 (注13)

大きなたいこ 小林純一 作詞 中田喜直 作曲

トン トン トン トン トン トン  
ドーン ドーン ドーン ドーン ドーン  
ちいさな ちいさな ちいさな ちいさな ちいさな  
ちいさな ちいさな ちいさな ちいさな ちいさな



#### ①イメージ

このうたは自然に身体の振りが沸き起こるうたである。歌いながら太鼓本体になったり、太鼓の打ち手になったり役割が入れ替わる。ものの大きさを明確に声で表現する。

#### ②音の高低

音の高低を識別できることは音楽の基礎能力につながる。大きい太鼓の“ドーンドーン”は低音で表され、小さい太鼓の擬態語“トントントン”は高音となっている。音の高低の意識化にもつながる。

#### ②ことばを遊ぶ

反対ことばであそぶ。ことばと身体を意識する。

自然体では“おおきなたいこドーンドーン”と歌いながら大きい身振り、“ちいさなたいこトントントン”と小さい動作となるが、をおこない、“おおきなたいこドーンドーン”と歌いながら小さい動作、“ちいさなたいこトントントン”と歌いながらで大きい振りをする。この歌はいろいろな遊び方を楽しめる。具体的なうたい方をポピュラーな子どもの歌3曲で示したが、それらの方法はこどもの感性にはたつきかけるためには重要な要素となるであろう。最初は意識して歌い、幼児の前では自然に無意識で表現できるよう研鑽を積む必要がある。

### 5 おわりに

音楽表現活動の授業では幼児に適切な援助が出来る力、幼児自身が楽しむ事が出来る力をもつ保育者を育てることを目標にし、将来保育者になる学生自身が心から歌うことを楽しめる授業方法を模索してきた。

学生とともに「子どものうた」に係わっていて気づかされたことの一つに、声楽を学ぶための、いわゆる発声訓練等の既成の指導方法から離れることであった。学生が心から楽しんで声を出し、身体の中から発する声は生き生きとして生命力にあふれていた。その声は歌い続ける打ちに張りのあるきれいな声となり、音程の正しい声に変化していった。

子どもが歌を歌うことについて渋谷伝氏は「歌を上手に表現して人に聴かせたりほめてもらったり、また、歌の美しさにしびれる（浮かれる、良い気持ちになる）ことでなさそうである。要するに、好きな歌をおぼえることやおぼえてよく知っている歌にあわせてからだをゆさぶったりする」(注15)のが楽しいのではないかと述べている。学生の楽しみ方も共通の現象が見られる。嬉々として音楽表現する姿から、子どもとともに育つ保育者、感動を共感できる心の通った保育者育っていくことが予想できる。

これからも学生自身の「やる気」を促す指導方法を模索して行きたい。

## 参考文献

- (注1) 幼稚園教育要領解説 p56
- (注2) 幼稚園教育要領解説 p123
- (注3) 幼稚園教育要領解説 p129
- (注4) 幼児と音楽 徳丸吉彦他 有斐閣選書 p76
- (注5) 幼児期の音楽と表現 渋谷伝 音楽の友社  
p180
- (注6) 幼児期の音楽と表現 渋谷伝 音楽の友社  
p180
- (注7) 「ことばが開かれるとき」 竹内敏晴 思想の  
科学社 p216
- (注8) 「ことばが開かれるとき」 竹内敏晴 思想の  
科学社 p241
- (注9) 「広辞苑」表現参照 岩波書店
- (注10) 幼児期の音楽と表現 渋谷伝 音楽の友社  
p90
- (注11) こどものうた2 長井春海 全音楽譜出版社  
p7
- (注12) こどものうた1 長井春海 全音楽譜出版社  
p69
- (注13) こどものうた2 長井春海 全音楽譜出版社  
p18
- (注14) 「広辞苑」表現参照 岩波書店
- (注15) 幼児期の音楽と表現 渋谷伝 音楽の友社  
p171